

地方創生で日本を元気にする

一般財団法人アーネスト育成財団
理事長 西河洋一

日本は、人口減少、高齢化という社会現象が起きている。その影響をまともに受けているのが地方である。なぜ日本は、首都および首都圏に集中してしまうのか。

自分もその中にいるが、自然に恵まれない人工都市で仕事して、本当に効率的なのかという疑問をもつ。暮らして幸せになる、住みたくなる魅力的な街づくりが、地方で出来ないかと思う。

西河技術経営塾の修了生の中に、地方創生に取り組んでいる経営者がいる。

5期生の小坂建設社長の小坂哲平は、生産年齢人口の減少に伴う生産性の低下が、地方都市の景気低迷の原因なら、生産性を向上させるか、生産年齢人口を増加させれば良いと考えた。

地方創生というと新たなビジネス構築となるが、人口減では難しい。その地方都市で既にビジネスを展開している企業の生産性を高める。足りない部分を補い、付加価値を生むビジネスモデルとする。

引退後のシニアができる仕事も多い。シニア雇用は、生産年齢人口の引き上げになる。近くのスキー場、夏と冬の営業での収益性は高いが、一年を通して考えると変動が大きい。スキー場周辺の宿泊機能を補いつつ、キャンプ場やバーベキューという施設を整備し、付加価値を高め、その施設名のブランディングづくりに取り組む。

住みたくなる街づくりには、生産性の高いビジネスモデルの構築が不可欠であると小坂はいう。

6期生のワンズディー社長の石井唯行は、生まれ故郷である千葉県館山市周辺の南房総地域の活性化を目的とした新規事業に取り組む。

「南房総に若者を呼び戻す」をスローガンに過疎化が進む南房総地域に新たな雇用の場を作り、Uターン、Iターンなどの移住者を増やす取り組みをしている。地域資源を活かしたやりがいのある仕事を作り、地方の所得向上を実現する。

地方で人を作り、その人が仕事を作り、街を作るという流れを起こしていく。使われていない土地や建物などを利活用事業に取り組んでいる。集まった社員と地域の仲間、協力者は、活動的で、エネルギーに満ちている。やりがいとは、一つのミッションに皆で知恵を絞り、挑戦するときに生まれる。確かに地方はピンチだが、その中で志高くエネルギーに満ちた人が確実に生まれていると石井はいう。

田舎には、日本の原風景がある。筆者は縁あって群馬の中之条町に良く出かける。「地方創生」は、次世代の日本を考えると重要な課題である。どこでも良いと思う。自分のこだわりの田舎を皆が持ち、そこでお金を使うことで、地方は元気になれる。

財団は、研究会を設置して、既成の概念にとらわれない「地方創生」の研究に取り組む。

豊かな社会づくりの一助になればと思う。